セカンド・サイト

冬也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンド・サイト

【Ｎコード】

Ｎ２９６４Ｄ

【作者名】

冬也

【あらすじ】

普通は見えないモノが見える少年・浅野陽。その瞳の事を知っている奴はいなかった。そしてある日。陽の前に子供の頃に一度出会った「青のレインコート」が現れる。そしてその日を境に、幼なじみの様子が変化する。青のレインコートの残した「お前を試す」という言葉の意味は？そして幼なじみに襲い掛かるモノとは？

プロローグ

「ママー。あの人何被ってるの？」
突然子供は言った。母親の太もも辺りまでしか身長が無い四、五歳ぐらいの幼い男の子は、母親と手を繋いで仲良さそうに帰っている途中だった。子供と手を繋いでいる反対の方の手には、たくさんの食品が入り、膨張したように膨れ上がった買い物袋が提げられている。おそらく買い物の帰りなのだろう。
「何言ってるの。どこにも人なんていないわよ」
母親は子供が言った事に耳を傾け、回りを見渡す。しかし誰もいない。この親子以外、この路地を歩いている人はいなかった。いるといえば野良犬ぐらいで、決して人などいない。母親は少し困った顔をして言う。一体この子は何を見ているんだろう、とほんの少し母親は不安になる。
そんな母親の不安も知らず、子供はますます不明な言葉を放つ。
「ママこそどこ見てるの。ほら、あの柱の前にいるよ。青い物被ってるでしょ。あれって、何被ってるの？」
子供は少しむきになっているのか、指で柱――電柱のふもとを指して叫ぶ。子供はそこに人がいると言い張るが、そこには人などいない。電柱のふもとにあるのはゴミが、今にも張り裂けそうなくらい入ったゴミ袋があるだけだった。まさか、それを差して人と言っているわけではあいだろうと母親は思った。

しかし、そうでなければこの子は一体何を言っているのだろう。一瞬、母親の背中に悪寒が走る。何か嫌な予感を、母親は感じ取った。
「ほら陽。帰るわよ。早く晩ご飯の用意をしなきゃね」
「え……ちょっと待ってよママ。あの人、何か言ってるよ」
子供――陽は再び不明な言葉を発する。感受性の強い子供が想像

上の遊びを作るのは良くある事だとは知っていたが、まさかこれまでとは母親は思ってもいなかった。それに子供は「あの人」といっている。大抵子供は同い年ぐらいの子に対しては「あの子」と言うはずだ。それを「あの人」と言っているという事は、大人の人の事を想像していっているのかもしれないと、彼女は思った。

段々母親も気味が悪くなり、陽の言葉など気にせず、無理やり腕を持って引っ張って行く。早くこの場から離れたい。それが母親の本心だった。

陽は母親の力には逆らえず、少し残念そうな顔で母親の後を歩く。しかしそれでも陽の視線は電柱のふもとにいるという人に向けられていた。

そして突然、陽は口を開いた。口真似しているような感じで声を発す。

「……せかんど……さいと」

セカンドサイト、と陽ははっきり口にした。名残惜しそうな瞳が見つめるのは、相変わらず電柱のふもとだった。その視線は一瞬も揺るぎはしなかった。

そこにどんな者がいたのかは彼にしか分からない。そして陽が口にした言葉に、どんな意味があるのかも分からない。

しかしこの瞬間から、陽の全ては始まっていたのだろう。

今に沈みそうな夕日は、燃えるように赤く照っていて、全てを真っ赤に染めていた。

プロローグ（後書き）

初めまして。冬が大好きな冬也です。
この小説のタイトル「セカンド・サイト」は「第二の瞳」という意味です。
そんなの分かる、という方には不必要な補足ですみません。

迫り来る陰　第一

目が覚めた瞬間しまった、と浅野陽は思った。

「やっちまった……」

ベッドから勢いよく起き上がった瞬間、その言葉を呟いた。彼の視線は枕元のデジタル時計に向けられていた。自然と彼の口から深い溜め息が漏れていた。時刻は八時三十五分。もう既に朝のホームルームの始まっている時間だった。高校に通って一年。彼にとって始めての遅刻だった。もうどれだけ急いでも仕方のない時間だった。

陽のこの時計は最近買った新品だというのに、よくベルが鳴らない事がある。不良品だと店に返品を求めるのも良かったが、何となく気が引けた。そして結局陽はこの時計を使っていた。

カーテンの微かな隙間から差し込む朝日が、陽の眼球に直撃する。陽は右手でその光を遮りながら、ベットから下りる。そして昨日寝る前に脱ぎ捨てたスリッパを、眠気で霞む視界で必死に探した。

冬という事で布団から出ると、急に寒気が陽に襲い掛かる。思わず彼は身震いした。ベッドから少し離れたタンスの元にスリッパがある。それを求めて陽は裸足で歩き出す。ひんやりとした感覚が足の裏から感じられた。

陽はスリッパを履くと、制服に着替え出す。遅刻確定だから、逆に緊張感が感じられない。もう今更急いでも、遅刻という事実が変わるわけでもない。そんな気持ちで彼の胸は満ちていた。

もう一年着ているためか、制服のサイズが小さく感じられていた。少し窮屈な制服を陽は着た。着る度に、自分の体が成長しているのだと実感出来るのが、嬉しいような嬉しくないような、微妙な気持ちだった。

陽はこの家に兄と二人で住んでいる。高台にあるこの家からは通学が不便だったが、陽は文句を言えるような立場ではなかった。

彼の両親は彼が小学生の時に離婚していて、母親の方は四年程前に交通事故でこの世を去っている。そして父親の方はというと、急な海外勤務が決まった。

長年父親と二人暮しだった陽は一瞬迷ったが、ついて行っても父親の仕事の邪魔になると考えて、日本に在住した。これは彼なりの気遣いのつもりだったが、余計父親に気を使わせてしまったようだ。

父親は上京している陽の兄に連絡を取り、海外に勤務している間陽は兄の家に住む事となった。陽の兄は陽と軽く十歳は離れており、その頃はまだ大学に入ったばかりだったが、今となっては、三十路間近の立派な大人となっている。

陽は兄に迷惑をかけた、と今でも申し訳無さそうに思っている。ただでさえ兄に迷惑をかけているため、通学の不便を愚痴るわけには行かなかった。

学校に行く準備を済ますと、陽は仏壇の前で正座をして手を合わせる。仲には優しい笑顔で微笑みかけている母親の写真があった。こんな所に母親が「いる」はずがないとは分かっていたが、それとこれは別物だ。

すると彼の周りで幼い子供が走り回っていた。夏服の元気そうな男の子だった。それは冬である今には、とても不似合いな格好だった。陽は別に驚いた素振りも見せず、彼の方を見る。

「おいこら。あんまり騒ぐんじゃない」

聞こえたのか聞こえていないのかは分からなかったが、陽がそう言った途端子供は玄関の方へと走って行く。その光景が、既に陽にとっては普通だった。

「……じゃあ母さん。行ってきます」

そう言って、遺影に向かって陽は軽く頭を下げる。にこやかなその写真を見ていると、まだ母親が生きているように思えて、陽の胸は強く締め付けられていた。

陽が玄関に向かうと、そこには先程の少年が座り込んでいた。そ

してそれだけじゃない。その隣には、また別の子供がいた。白いワンピースの似合う、幼げな女の子だった。
その二人は、近寄ってくる陽の存在に気付くと、嬉しそうに飛び跳ねた後、陽の方へと走ってきた。――そして二人の体は陽の体を通り抜ける。
「今から学校なんだ。邪魔するなって」
そう言うと、二人は声も無く穏やかな笑顔を浮かべる。

陽は兄と二人で住んでいるが、正確に言えばもう二人一緒に住んでいる。そしてその二人は陽にしか見る事が出来なかった。
生まれつき陽には不思議な力があった。――普通の目では決して見る事が出来ないものを、陽は見る事が出来る。昔はぼんやりとしか見えなかったものの、成長するに連れてそれははっきり見えるようになっていた。つまり陽は常に、不思議なそれらに囲まれて生きて来た。そして両親の離婚の話の発端は、ここにあると言っても過言では無い。
陽のこの目の事に少しずつ気付いてきていた母親は、父親にその事を相談するものの、父親は母親の言う事を冗談とでしか受け付けていなかった。陽の事に無関心なそんな父親に怒りを抱き、とうとう母親は離婚を迫った。
その事を陽は知っているからこそ、今でも彼の心は締め付けられていた。自分のせいで両親の関係に亀裂が入った。その考えを止める事は、陽には不可能だった。
そして陽は静かにスニーカーを履く。そして鞄を手に、玄関の取っ手に手をかけた。
「行って来ます」
そう呟いて陽は家を後にした。陽の寂しげな背中を、二人はじっと見送っていた。

迫り来る陰　第二

陽は容赦ない教師の説教で、無気力な姿となっていた。
今から一時間ほど前に遡る。遠慮がちに陽が教室に入った途端、彼の額に猛スピードのチョークが激突した。チョークは彼の額に当たると刹那、チョークは木っ端微塵に砕け散った。
陽は思わず怯み、その場に倒れ込んだ。決して気を失ったわけではなかったが、あまりの衝撃に彼は耐える事が出来なかった。
ただのチョークとは思えない重圧感と痛みを味わった。
そしてその途端、教師の怒声が教室に響いたのだった。生徒の間で化け物と恐れられている数学教師・益田の声だった。獣の咆哮に似たそれは、陽の耳に深く刻まれた。
数学の授業が終わるや否や、陽は益田に連れられて「魔の説教室」へと向かった。そしてその時の事を、陽は今でも忘れる事が出来なかった。鼓膜が裂け飛ぶような痛み。それを始めて味わった瞬間だったに違い無い。
遅刻するもんじゃないな。陽は心の底からそう思っていた。

そして今、陽はただならぬ虚脱感を感じていた。どれだけ時間が過ぎてもそれは変わりなかった。溢れてくるのは溜息と眠気だけ。何も手につかない状態になっていた。教室でも一番後ろに位置する席で、机に顔を伏せている。
「……陽。気分、悪いの？」
途端女性の静かな声が聞こえて来た。そしてこの声に陽は聞き覚えがあった。それも一度や二度では無い。ほぼ毎日聞いていた声だ。
陽は虚脱感のせいか、重くなった頭をゆっくりと上げ、その方向を見た。するとそこには肩まである黒髪が、非常に似合った女の子――咲野明がいた。
「ああ、明か。おはよう」

陽はおはよう、とだけ言って再び頭を伏せる。
軽くあしらった陽の言葉は、彼女のそばにいる、もう一人の女の子の気に触った。そしてその女の子は、今にも誰かに殴りかかってしまいそうな勢いで、顔を伏せた陽に近寄る。
そして同時に彼の制服の襟を掴んだ。そして無理やり陽の頭を持ち上げる。その時、陽は地球の重力に反するような感覚を味わっていた。

「おお、凪。おはよう」
陽は呆けた様子でそう言った。陽の視線の先には、後ろで髪を括った女の子がいた。険しい顔で、陽の方をじっと見ている。陽は別に不信にも思わず、ただ呆けた顔で彼女を見ていた。
「あんたさ、せっかく明があんたを心配してあげてるのに、その対応は何なのさ。それにあたしの名前は凪沙だ。凪なんて呼ぶな！」
彼女――藤堂凪沙はひどく怒った様子で陽に叫んだ。そして彼の頭を机に向かって強く叩きつける。陽はそれに抵抗できず、無様にも机に額を強く叩きつけてしまう。そしてそこは、一時間ほど前にチョークの衝撃を受けた場所だった。
言い表せないほどの痛みが、彼の額に走った。自然と陽の手は自分の額へと向かっていた。そしてほのかに涙を浮かべ、自分の額を摩る。
「陽、大丈夫？　痛くない？　……もう……凪沙」
明は優しく手を差し伸べ、陽の額を撫でる。心配そうな瞳で陽を見ながら、凪沙に言う。
凪沙は相変わらず険しい表情で、陽の方を見ていた。信用してないぞ、といった敵意丸出しだった。

陽は結果的に兄の優一の元で暮らす事になった。当時大学生だった優一は二階建てのマンションに住んでいたため、小学生の弟が一人来た所で、然程暮らしぶりは変わりなかった。飯を少し多めに作

る、という事ぐらいだった。
陽はその町にある小学校に通うこととなった。転校生、ということで注目を浴びるのが、陽は少し気が引けたが、それ以外は然程気にしていなかった。友達が出来るか出来ないかなんて事を、陽は別に心配していなかったのだ。
何故なら、陽の周りにはいつも同い年ぐらいの子供がいるのだから。彼にしか見る事が出来ない友達が。
陽は軽い気持ちで体育館に向かった。体育館にたくさんの生徒がいる。自分が来るのを知っている人たちが何人もいる。
自分では気付いていなかったが、陽は心のどこかで楽しみにしていた。どんな人に出会うのか、どんな不思議な奴がいるのかを。
そしてそこで、陽は明と凪沙に出会った。

今となっては、陽にとってそれは懐かしい記憶だった。明と凪沙に初めて会った時の記憶。そしてその時から三人の関係は変わってはいなかった。
陽と明が少しでも話をしていると、凪沙は陽に八つ当たりのようなものをしてきた。何でも明と凪沙は幼稚園の時からの親友で、おそらく明が陽にいじめられていると思ったのだろう。
いつもいつも陽に暴言を吐いたりしていた。陽と明がどれだけ言っても、凪沙は決してやめなかった。友達思いなのは良いと思うが、過保護すぎるんじゃないか、と陽は昔から思っていた。
そして今も、その考えは変わっていなかった。
「……お前って、本当に過保護な親みたいだな」
「え？　何だって？」
聞き返してきた凪沙の表情は、先程よりも険しさが増していた。
惚けた反応は間違いなく嘘だな、と陽は判断した。
「……何でも無い」
もう一度言えば自分の首が吹き飛ぶかもしれない。彼女に「過保護」という言葉は禁句だな、と心の底から陽は感じていた。

迫り来る陰　第三

浅野優一は、深い溜息を一つついた。あまりに大きな溜息だったため、それは隣の女性社員の耳にも、はっきりと聞こえていた。

「どうしたんですか優一さん？　顔が青いですよ？」

その女性社員は、心配そうな目で優一をじっと見る。そして優一に優しく問い掛けた。

「……ん？　おお、麻衣か。どうした？」

ぼーっとした様子で会社の外を見ていた優一は、やっと女性社員――咲野麻衣の声に気が付いた。腰まで黒髪が伸びている。癖の無い、綺麗な髪質だった。

ずっと隣で仕事をしていたというのに、今更彼女の存在に気付いたのだった。三十路間近の男なだけあり、あごには豊富な髭があった。

男前というには多少遠い存在だが、その髭は何故か非常に似合っていた。

「どうした、じゃないですよ。優一さんってば、顔が真っ青なんですもん」

優一の曖昧な対応が少し頭に来たのか、頬を膨らませた。まるで子供のような行動だった。そんな麻衣の顔を見て、思わず優一は笑いそうになった。先程まで固かった彼の唇が、微かに緩んだ。

「あー、心配させちまったか。悪い悪い」

「べ、別に心配してはいませんけど……」

優一は自分の顔色を隠すようにして笑顔を浮かべた。彼なりの思慮のつもりなのだろう。精一杯、麻衣の前では元気に振舞っている。

そんな優一の姿に、麻衣の心は少し痛んだ。

（……何も無いなんて、絶対嘘だ。どうして相談してくれないんだろう）

そんな思いだけが、麻衣の胸にあった。

顔色の悪い優一を見る度に、彼女の気持ちは強くなってゆく。
そんな彼女の気も知らず、優一は青白い顔で再び窓の外を眺めた。高層ビルが立ち並ぶ光景を、優一は辛そうな目で眺めていた。
「……麻衣。あのさ……」
優一は静かに口を開いた。そしてその声を、麻衣はただ静かに聞いていた。
外は既に夕日の光に照らされて、赤く染まり切っていた。

やっと終わった、と浅野陽は心の底から思っていた。
教室の壁に吊るされた楕円形の時計は、午後四時を示していた。既に大半の生徒は教室から飛び出して、それぞれの家へと帰っていた。明日は期末テストだという事もあり、今日はどの部活も休部となっている。どうやら家庭学習に励め、との教師からの忠告のようだった。
陽は自分の席でのんびりと帰る用意をしていた。机の側面にあるフックにぶら下げた鞄と取り、その中に次々と教科書を詰め込んでゆく。軽かった鞄も、段々と重量を増していくのが簡単に分かる。
「うし、これで全部だな」
全て鞄に詰め込んだ事を確認すると、陽は鞄を肩にかけるようにして持ち、椅子から立ち上がる。急いで帰って晩飯の用意をしなければならない。そんな考えだけで、陽の脳内は満ちていた。
浅野家では両親不在のため、毎週食事当番を兄弟で代わりながら過ごしている。そして今週は陽が食事当番となっていた。そのため、急いで帰って仕度をしなければいけなかった。
「……陽。早く帰ろう」
教室から足を一歩踏み出した途端、明の声がした。陽は少し驚き、思わず横に振り向いた。
するとそこには、首に毛糸のマフラーを巻いた明がいた。上目遣いで陽の方をじっと見つめている。彼女の頬は、ほのかに朱を浮かべていた。

「め、明。まだ帰ってなかったのか？」
明は小さく頷いた。
「……陽を待ってた」
その言葉だけいうと、明は再び黙り込んだ。明は小学生の時から無口で、始めの頃はなかなか彼女の考えが読めず、陽も戸惑うばかりだったが、今となってはそれにも慣れていた。

「お前なぁ、待ってるなら待ってるで教室の中にいろよ。廊下なんかにいると冷えて風邪、引いちまうだろ？」
そう言って陽は明の頭にそっと手を置いた。優しい手つきで彼女の頭を撫でる。さらっとした、彼女のきめ細かな髪が陽の手を妙に擽る。
陽は途端に顔を真っ赤にした。耳まで赤くなった彼女は恥ずかしそうな目で、反面嬉しそうに陽の方をじっと見ていた。
――そんな時、それは聞こえた。
夕日の赤い光が差し込む廊下に、静かな足音が響いている。始めは遠くの方だったが、時間が経つに連れてそれは近くなってくる。段々とその音は大きくなっていく。
見回りの先生かな、と陽は軽い気持ちで考えていた。然程気にも止めず、陽は明を連れて階段を下りようとする。
二人が足を止めるまで、然程時間はかからなかった。陽と明は足音に不信を抱く。足音は、普通ではなかった。水溜りの上を歩くような軽快な音と、液体が滴る音が段々と聞こえて来た。
二人の気は自然と引き締まった。冷や汗が額を流れ、頬を伝って、そして廊下に落ちた。近寄って来る液体の滴る音と、それは近かった。
何か、嫌な予感がする――そんな衝動に駆られ、陽は思わず明を抱き寄せる。明も自然と陽の袖を掴んだ。
足音は、遂に止まった。しかし、液体が滴る音は止まりはしなかった。

「――え？　陽君がですか？」
咲野麻衣は少し驚いたような声を上げた。その反面、彼女の表情は疑っているようなものだった。麻衣は缶コーヒーのプルタブを指先で上げる。すると勢いのある音を立てて、見事缶コーヒーの飲み口に穴が出来た。麻衣はそこにそっと唇をつけた。
「ああ。……陽がさ、何だか遠くに行っちまう夢を見たんだよ。何つーかこう……口では言い表せねぇんだけどよ。何かに巻き込まれて……」
優一は真剣な表情を浮かべて言った。彼の眉間に微かにしわが寄る。刈り上げられた短髪。如何にも元気そうな彼の表情が、徐々に弱々しくなる。辛さに耐えているかのようなその姿は、麻衣の心を揺り動かす。
二人とも、依然とした様子で缶コーヒーを握り締めていた。

陽と明の前に、それは姿を現した。
夕日に照らされても青色がはっきりと分かるレインコート。頭部も何もかもが、それで覆い隠されていた。見えるのは紫色をした、不気味な手。足には漆黒のブーツを履いていた。そしてレインコートは雫で濡れており、いつまでもそこから雫が垂れている。
それは、朝方陽が通学途中に目にした、青のレインコートと変わりなかった。少し差があるとすれば、レインコートが濡れている程度だった。
それを目にした瞬間、陽は目を細める。庇うように、隣にいる明の前に手を出す。
陽は鋭い瞳でそれを睨みつける。冷や汗が止まりはしなかったが、陽はその目を逸らしはしなかった。
「……お前、俺に何か用があるのか？」
陽が言った言葉に対して、レインコートは答えようとしない。あるか無いか分からない顔の部分を、じっと陽たちの方を向けている。

「……黒楼に気をつけろ。第二の瞳を持つ者」
「え？」
陽は思わず聞き返した。あまりに小さな声で、はっきりと言葉は聞こえなかった。声は透き通るように美しい声だった。朝方会った時の二重の声とは、大違いだった。
レインコートはそう言い残すと、二人に背を向けて、来た道を戻ろうとする。陽は引き返すレインコートに近寄ろうとする。そんな時、陽の袖は強く引っ張られた。
「……駄目」
明が陽の袖を強く引っ張っている。袖を通じて、明の震えを陽は感じ取った。戸惑った表情を浮かべた後、陽はその場に立ち止まった。
陽はレインコートが去る様を、ただ眺める事しか出来なかった。
そしてこの時、陽は初めて気がついたのだった。レインコートから垂れていた多量の雫。それが……。
――それが血液、だということに。

迫り来る陰　第四

「ただいまー。……おい陽。飯まだなのか？」
優一は家に帰宅するや否や、そんな言葉を発した。陽を急かすようなその言葉は、キッチンで調理する彼にも聞こえていた。微かに陽は目を細める。
「まだだよ。ごめん、俺ちょっと帰りが遅かったんだ」
陽は慣れた手つきで次々と野菜を切っていく。包丁が野菜を切る音が家内で静かに響いている。優一は、何の変哲も無いその音に聞き入っていた。
玄関のすぐ近くにある扉。それを開けると、もうそこはリビングだった。冬対策のため、既に暖房器具がそこにはあった。そしてテレビでは若い女性キャスターが、落ち着いた声で明日の天気について喋っている。
「明日は低気圧が近付き、広範囲で雨が――」
話からすると、どうやら明日は雨が降る模様だ。優一はその天気予報を聞くや否や、キッチンの方へと顔をやった。甘辛い食欲をそそる匂いが、キッチンの方から漂ってきている。
「陽。明日雨が降るんだってよ。傘を……」
そこまで言った時、優一は微かに顔を顰める。しまった、と小さく呟いた。
「傘は壊れてるんだった。……だから陽。明日はレインコート、着て行けよー」
途端何かが落ちる音がした。軽快な音。優一は然程その事を気にしなかった。
優一は会社の制服を脱ぐ。しかし、途中彼の上着ポケットから何かが落ちた。「神楽銀行員・浅野優一」と書かれた、彼の身分証明書だった。
彼は急いでそれを拾った。

「おい陽。俺の聞いてんのか？　返事くらいしろよ」
優一は全く反応が無い陽に、少し違和感を抱いた。炒めている音で聞こえづらいのもあるかもしれないが、それでもおかしい。
「おーい陽。どうかしたのか？」
もう一度だけ優一は陽に呼びかけた。しかし、やはり返事は返って来なかった。
陽はその頃キッチンの方で、優一の発した「レインコート」の言葉を聞き、体を震わしている。その震えが止まる気配は全く感じられなかった。彼の手は、自然とフライパンから離されていた。床には先程まで調理に使っていた菜箸が落ちていた。
「レイン……コート」
震える声で、その言葉を放つ。
フライパンの中で炒められていたチャーハンは、徐々に黒く焦げ付いていった。

その頃咲野明はベッドの上で寝転んでいた。柔らかな布団に身を任せ、明は呆けた様子で天井を眺めていた。彼女は全身から力を抜いている。
「あのコートの人、誰だったんだろう」
つい人、と言ってしまったが、本当のところ人であるかは分からなかった。明の脳内には夕方学校で見た青のレインコートの事ばかりが浮かんでいた。
そういえば陽は顔見知りだったはず。どうして知っているんだろう。陽の知り合いなのかな。だとしたら本当に誰なんだろう。
明は自然とそんな事を考えていた。陽は微かに驚いている表情は見せたものの、自分とは驚いた様子が違っていた。もう何度か見ている様子だった。
考えても切りが無い。答えが自分に分かるはず無い。そんな途方もない事を、明は考える事がやめられなかった。気になって仕方が無い。あのレインコートの正体も。レインコートに何故、血液がつ

いていたのかも。
「……やめた」
彼女は遂にそれを考えるのをやめた。
明は一度寝返りをうつ。そのせいで彼女が着たピンク色のパジャマが捩れる。彼女はベッドにうつ伏せの状態だった。陽はうつ伏せのまま、自分の髪に触れてみる。そして夕方の事を思い出す。
陽が自分の頭を撫でてくれた事。それをふと思い出しただけで、彼女の顔は一気に赤くなった。恥ずかしそうな彼女の表情は、とても女の子らしいものだった。
「……陽」
明は静かに目を閉じる。依然と彼女の頬も耳も真っ赤なままだった。そんな彼女の様子は、とても幸せそうな姿だった。
そんな彼女の背後に、それは迫りつつあった。

「ごちそーさんっと。いやー。やっぱお前、料理上手いよなぁ」
今の陽にとってはお世辞にもならない言葉を、優一は再び言った。彼の前の食器の中身は綺麗に無くなっていた。
そんな優一の言葉を聞いて、少し目を逸らす。少なくとも優一の顔は、彼の視界からは消えている。
「良いよ兄さん。別にそんな気を使わなくて。まずいに決まってるじゃないか」
陽は少し落ち込んだ様子で呟いた。冷えたお茶の入ったコップを手に取り、陽はそれに口をつける。少しコップを傾けると、コップに注がれているお茶は彼の口の中へと流れ込む。冷たいものが喉を伝うのがはっきりと陽には分かった。
「いや陽。別にまずくないって。すごくうまか」
「だったら御代わり、いる？」
陽は低い声で優一にそれを突きつけた。優一は思わず、突きつけられたそれを見て、言葉を詰まらせる。陽が突き出したもの。それは黒く焦げ付いた大盛チャーハンだった。辛うじて姿を保っている

ものの、何も知らない人が見れば、それは間違いなくチャーハンには見えなかった。
「……遠慮しておきます」
優一は申し訳無さそうな表情で言った。
その言葉を聞いて、陽は小さく溜息をついた。
「ほらね。……このチャーハン、焦げまくってまずいに決まってるじゃないか。無理してそれ全部、食べなくて良かったのに」
陽は優一の下にある皿を見る。中身は全部無かった。優一は焦げて驚異的なまずさを誇る、このチャーハンを食べるのを見事完遂している。
「いや、だってよ。せっかく作ってくれたのに残すのって……悪いだろ？」
優一はそう言う。それは彼の本心だった。相手の事を思って行動する。陽はそんな優一の性格が好きだし、何度も助けられている。たった今のこの状況もそうだ。陽は心のどこかで優一に感謝していた。いつも助けられてばっかりだ、と思う事も良くある。
だからこそ、今回の事を相談するわけにはいかなかった。これ以上迷惑を彼にかけたくなかったから。
本当は怖くて震えが止まらないくらいなのに、陽は決して相談しなかった。
青のレインコートの事を、絶対に。

闇が侵食していた。
殆どそれは体を飲み込んでいた。漆黒の闇は徐々に体を自分の一部として侵食する。まるで意識があるかのように、それは体の上を這いずり至る所を取り込んでいく。
次第にそれは原形を留めていない、ゼリー状のモノとなっていた。人間の原型を全く留めていなかった。
一瞬にして、体は闇によって侵食されていく。胸元辺りまで、闇は迫ってきていた。ピンク色のパジャマは闇に触れた瞬間、触れた

部分が溶けてゆく。尋常ではない熱が、闇が体を這いずる不気味な感覚が彼女を襲う。
神経が狂ってしまいそうなほどの痛みを、彼女は味わっていた。既に混乱して、声が出ない。助けを呼ぶにも、声が出せなかった。ただ痛みを味わう事しか、彼女に道は残されていなかった。
そして一瞬にして、彼女の首までもが闇に飲み込まれる。首から下の感覚が、もう既に完全に麻痺していた。抵抗する気力すら、湧いては来なかった。
（陽……助け……）
そこで、明の意識は途切れた――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2964d/

セカンド・サイト

2010年10月10日19時22分発行